正岡子規に見る「明治の詩魂」

九州造形短期大学教授　小柳陽太郎

「先がけの勲功立てずば生きてあらじと誓へる心生食知るも」。これは、平家物語を詠じた子規の歌である。……読んでゐると、子規の歌が、決して佐々木四郎の気持ちといふ様な曖昧なものを詠じたのではない事がよく解る。荒武者と駿馬との躍り上る様な動きを、はつきりと見て、それをそのままはつきりした音楽にしてゐるのである。

（小林秀雄「無常といふ事――平家物語」）

(1)　子規の生涯

(2)　若き日の子規

(イ)　萬有は余の眸中に集まり来らざるは無く、しかも彼等は余と調和するがために沈黙し、余と調和するがために動揺せるが如し　（31・8・1　十年前の夏）

(ロ)　かくの如く余は哲学を志すにも拘らず　詩歌を愛すること甚しく　小説なくては夜が明けぬと思ふ位なりき余は不思議に思へり　何故に哲学といひ詩歌小説といふが如き全く反対の者を　両立し難き者を同時に好むかとおかしく思へり　（21・　筆まかせ――哲学の発足）

(ハ)　馬琴を読めハ馬琴にほれ　春水を読めハ春水にほれ　西鶴　門左衛門を読めハ元禄文にうつつをぬかし　源氏を読めハ中古の文体をしたふ　少小より余が思想の変遷を見るも龍渓居士に驚かされ春迺舎主人に驚かされ二葉亭に驚かされ篁村翁に驚かされ近頃又露伴に驚かさる　吁五六年の間己ニ五驚を喫す　今後猶幾驚を喫せんとするや　一驚又一驚、驚死するに至らざれば己まざるべし　（23・11・　藤野古白あて書簡）

(3)　國の運命とともに

(イ)　今や日清事有り　王師十萬深ク異域ニ入ル誠ニ是レ国家安危ノ分ルル所東洋漸ク将ニ多事ナラントス　僕亦意ヲ決シ一枝ノ筆ヲ挾ミ軍ニ従ハント欲ス…僕若シ志ヲ果サズシテ斃レンカ僕ノ志ヲ遂ゲ僕ノ業ヲ成ス者ハ足下ヲ舎テ他ニ之ヲ求ムベカラズ　足下之ヲ肯諾セバ幸甚　（28・2・25　碧梧桐、虚子あて書簡）

(ロ)　送下正岡子規従ニ近衛軍一赴中遼東上　福本日南

春風に纜ときて立出る君が装の軽くもある哉

日南ざれ歌を作りて送られしかば返しとはなくて

かへらじとちかふ心や梓弓矢立たばさみ首途すわれは

（かけてそちかふ）　（28・4・10）

(ハ)　日本の國を　（五首中三首）

千はやふる神の御代より日の御子のいやつぎ〳〵にしろしめす國

たひらかに緑しきたる海の上に桜花咲く八つの島山

豊葦原の瑞穂の國と天の神がのりたまひたる國はこの國

（31・4・12）

(ニ)　天長節　（八首中三首）

天の下しらす日の御子その御子のあれましし日に常晴にして

朝風の吹きくるなへに君が代を歌ふ聲聞ゆ学校の方に

草の戸に御姿掛けて菊活けてわが祝ふらくは千代いませとぞ

（31・11・3）

(4) 自立、決断の力――「美」の標準――

(イ) 美にして善なるも善し。美にして善美の外に立ちたるも善し。われらはホーマーの詩を知らず、果してホーマーの詩は終始「善」を離れざるか。ホーマーの詩「善」を離れずとするも、われらはホーマーに倣はんと思はず、われらは善悪の外に美を認むればなり。われらはプラトーが真善美とやらを説いたからとて、それに従はざるべからずとは思はず。われらの美と信ずる所は、ホーマーもプラトーも如何ともする能はざるなり。

（31・4・17　人々に与ふ）

(ロ) 先日短歌会にて、最も善き歌は誰にも解せられるべき平易なる者なりと、ある人は主張せしに、歌は善き歌になるに従ひいよいよこれを解する人少き者なりと、他の人はこれに反対し遂に一場の議論となりたりと。愚かなる人々の議論かな。文学上の空論は又しても無用の事なるべし。何とて実地につきて論ぜざるぞ。（略）我は解しやすきにも善き歌あり解し難きにも善き歌ありと思ふは如何に。

（34・3・27　墨汁一滴）

(ハ) 自分の俳句が月並調に落ちては居ぬかと自分で疑はるるが何としてよきものかと問ふ人あり。答へていふ、月並調に落ちんとするならば月並調に落つるがよし、月並調を恐るるといふは善く月並調を知らぬ故なり、月並調は監獄の如く恐るべきものに非ず、一度その中に這入つて善くその内部を研究し而して後に娑婆に出でなば再び陥る憂なかるべし。

（34・4・22　墨汁一滴）

(ニ) 先頃の『葯房漫艸』に美の事を論じて独りぎめになつては困るといふやうな事を書いてあつたと思ふ。余の考へでは美の判断は二人ぎめでも三人ぎめでもない、やはり独りぎめより外はない、ただ独りぎめに善いのと悪いのといろいろある。

（34・6・19　墨汁一滴）

(5) 強烈な現実的精神――「写生」の意味するもの

(イ) 小生ハ感情の上にては百年も二百年も生きられるやうに思ひ居候故に病気のために遠大の事業をやめる抔申ことハ無之候併シ道理の上よりは明日にも死ぬかと存候

感情が正しきか道理が正しきかといはばいふ迄もなく道理正しく候　それにも拘らず感情正しきやうに思ふハ即ち凡夫の凡夫たる所以に候　人間が凡夫でなかつたら楽もへちまもあつたものにハ無く候

（30・3・28　高浜虚子あて書簡）

(ロ) 月見れば千々に物こそ悲しけれ我身一つの秋にはあらねど

といふ歌は最も人の賞する歌なり。上三句はすらりとして難なけれども、下二句は理屈なり蛇足なりと存候。…もしわが身一つの秋と思ふと詠むならば感情的なれども、秋ではないがと当り前の事をいはば理屈に陥り申候。

（31・2・21　歌よみに与ふる書）

(ハ) 花は我が世界にして草花は我が命なり。幼き時より今に至るまで野辺の草花に伴ひたる一種の快感は時として我を神ならしめんとする事あり。

（31・12・10　我が幼時の美感）

(ニ) こちらから情を以て向ふと、今迄は無心のやうであった天然界が俄に活動しはじめて、総ての物が情を以て周囲から余に話しかける、即ち総ての物に霊があって、それが皆自分一人に向って来る、即ち余が中心に立って居て周囲を支配して居るやうに思ふ。

（32・5・10　赤）

(ホ) 草花の一枝を枕元に置いて、それを正直に写生して居ると、造化の秘密が段々と分って来るやうな気がする。

（35・8・7　病床六尺）

(6) 病といふ嵐の中で

(イ) 歩行し得ざることここに五旬、体温高き時は三十九度に上り、低き時は三十五度七分に下る。忽ち寒くして粟肌に満ち、忽ち熱くして汗胸を濡ほす。しかも一日も精神の不愉快を感じたることなし。

（29・3・17　高浜虚子あて書簡）

(ロ) 小生近時の衰弱は身体と共に精神上に及び言語道断の事に候　体が痛むとて泣き昔を想ふて泣き未来を想ふて泣く　或時ハ死ぬるのがいやで泣き或時ハ死にたくて泣く。併シ泣きながらも猶大食致居候　先御安心被下べく候。

（34・1・8　菊池謙二郎あて書簡）

(ハ) 昨夜の夢に動物ばかり沢山遊んで居る処に来た。その動物の中にも死期が近づいたか、ころげまはって煩悶して居る奴がある。すると一匹の親切な兎があって……（略）

（34・4・24　墨汁一滴）

(ニ) しひて筆をとりて（十首中五首）

佐保神の別れかなしも来む春にふたたび逢はんわれならなくに

いちはつの花咲きいでて我目には今年ばかりの春ゆかんとす

世の中は常なきものと我愛づる山吹の花散りにけるかも

夕顔の棚つくらんと思へども秋待ちがてぬ我いのちかも

いたつきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ

心弱くとこそ人の見るらめ

（34・5・4　墨汁一滴）

(ホ) 試に我枕もとに若干の毒薬を置け。而して余が之を飲むか飲まぬかを見よ。

（34・5・11　墨汁一滴）

(ヘ) 熱高く身苦し。初めは呻吟、中頃は叫喚、終りは吟声となり放歌となり、都々逸、端唄、謡曲、仮声、片々寸々又継又続、倏忽変化自ら測る能はず。

（34・6・9　墨汁一滴）

(ト) 絶筆三句

糸瓜咲いて痰のつまりし佛かな

痰一斗糸瓜の水も間にあはず

をととひのへちまの水も取らざりき

（35・9・18）

年号	西暦	年齢	
慶応三	一八六七	一	九月一七日(新暦一〇月一四日)、伊予温泉郡藤原新町(現松山市)に生れる。父隼太は松山藩御馬廻加番、母八重は儒者大原有恒の長女。幼名は処之助、のち升と改める。本名常規
明治五	一八七二	六	三月、父隼太没。以後、八重、常規、妹律は八重の実家大原家に養われる
七	一八七四	八	智環学校に学び、のち勝山学校に転校。これよりさき、大原観山(有恒)に漢学を学ぶ
一三	一八八〇	一四	三月、松山中学入学。友人竹村鍛、三並良らと詩作の会「同親吟社」を興し、河東静渓の指導をうける
一六	一八八三	一七	この頃、政談演説に関心を持つ。二月、叔父加藤恒忠に東京遊学の希望を書き送る。五月、松山中学を退学。六月上京。赤坂の漢学塾須田学舎に入学。また共立学校で英学を学ぶ
一七	一八八四	一八	三月、旧藩主久松家の常盤会給費生となる。九月、大学予備門の入学試験に合格
一八	一八八五	一九	学年試験に落第。夏、帰省し井手真棹に和歌を学ぶ。この頃、俳句を始める
一九	一八八六	二〇	この頃、寄席通いに熱中。四月、友人漪水則遠急逝。夏、旧藩主子息に従って日光に遊ぶ。この年、大学予備門改称され第一高等中学校となる
二〇	一八八七	二一	七月、帰省し柳宗悦門の大原其戎に俳諧を学ぶ。この頃から野球に熱中
二三	一八九〇	二四	二月、新聞「日本」創刊。五月、喀血、時鳥の題で句を作り、子規と号した。夏目漱石と親交
二四	一八九一	二五	二月、五百木飄亭、新海非風らと短歌俳句等の研究会「紅葉会」第一回を催す。七月、第一高等中学を卒業。帰郷および上京の途次、関西を旅する。九月、文科大学哲学科に入学
二五	一八九二	二六	二月、国文科に転科。喀血、房総旅行。五月、高浜虚子と文通、交友始まる。六月、学年試験を放棄。本郷駒込追分町に転居。小説『月の都』を執筆。
二六	一八九三	二七	二月、帰郷の途に就く。一一月、武蔵野吟行。一二月、俳句分類に着手する
二七	一八九四	二八	句作に熱中。上根岸八八番地に転居。『月の都』の評を露伴らに乞う。六月、「日本」に『獺祭書屋俳話』を連載。学年試験に失敗し退学を決意。一一月、母と妹、東京へ移転。一二月、日本新聞社に入社
二八	一八九五	二九	「日本」に俳句欄を新設。三月、伊藤松宇らと「俳諧」創刊(二号で廃刊)。帝国大学文科大学中退。五月『獺祭書屋俳話』を出版。七月、東北旅行。この年「日本」に『芭蕉雑談』他を連載
二九	一八九六	三〇	二月、上根岸八二番地に転居。「小日本」創刊(七月廃刊)、編集責任者となり、中村不折らを知る。この頃〈写生〉に関心を持ち郊外を吟行。冬、二高を中退した虚子、碧梧桐上京
三〇	一八九七	三一	三月東京を発つ。四月、藤野古白自殺。五月、帰国途次、船中で喀血し神戸病院に入院。須磨で療養の後、八月、帰省。松山中学在職中の漱石のもとに寄偶。漱石、柳原極堂らと句作に熱中。一〇月上京。『俳諧大要』等を「日本」に連載
三一	一八九八	三二	三月、カリエスと判明、手術。眼病烈しく歩行困難となる。四月『松羅玉液』、五月『俳句問答』を「日本」に連載。夏の頃から毎月子規庵で俳句小集を催す。八月、新体詩等を「日本人」に発表
三二	一八九九	三三	一月、松山で「ほとゝぎす」創刊。これに協力。『俳諧反故籠』を連載。三月、手術。四月下旬、再度手術。一二月、子規庵で第一回蕪村忌。この年「日本」に『明治二十九年の俳句界』『俳人蕪村』等を連載
三三	一九〇〇	三四	一月、虚子、碧梧桐らと蕪村句集輪講会を始める。二月「日本」に『歌よみに与ふる書』を連載、短歌革新にのりだす。一〇月、「ほとゝぎす」を東京に移し、新「ホトトギス」(発行人、虚子)を興す。この年、人力車で数度外出、『車上所見』等を草する。「日本」に『明治三十年の俳句界』を、「ほとゝぎす」に『古池の句の弁』『俳句分類』『写生・写実』等を発表
三四	一九〇一	三五	一月「ホトトギス」に『俳句新派の傾向』を発表。同月『俳諧大要』刊行。二月、香取秀真、岡麓はじめて子規庵を訪ね、以後歌会を定期的に持つ。五月、一時容態悪化。この頃初めて水彩画を試みる。この年『墨堤の歌』『俳人太祇』等を発表
三五	一九〇二	三六	『日本』に『叙事文』を連載、写生文を提唱。この頃、伊藤左千夫、長塚節ら歌会に参加。四月、万葉集輪講会を始める。八月、大量の喀血。九月、夏目漱石、ロンドンに留学。秋「山会」という写生文の会を持つ。この年『蕪村句集講義』冬・春の部等刊行
三六	一九〇三	三七	病状一進一退。一月、「日本」に『墨汁一滴』を連載(七月まで)。九月『仰臥漫録』に着手(三五年九月まで)。一〇月より病状悪化。この年『春夏秋冬』春の部他刊行
三七	一九〇四	三八	一月、病状とみに悪化。碧梧桐、左千夫、虚子、秀真、鼠骨ら輪番で看護。四月、『獺祭書屋俳句帖抄・上』他を出版。五月「日本」に『病牀六尺』の連載を始める
			九月一〇日、最後の蕪村句集輪講会を催す。一四日、『九月十四日の朝』を口述。一八日、朝から容態悪化、絶筆三句を書く。一九日未明没。二一日田端大龍寺に葬られる